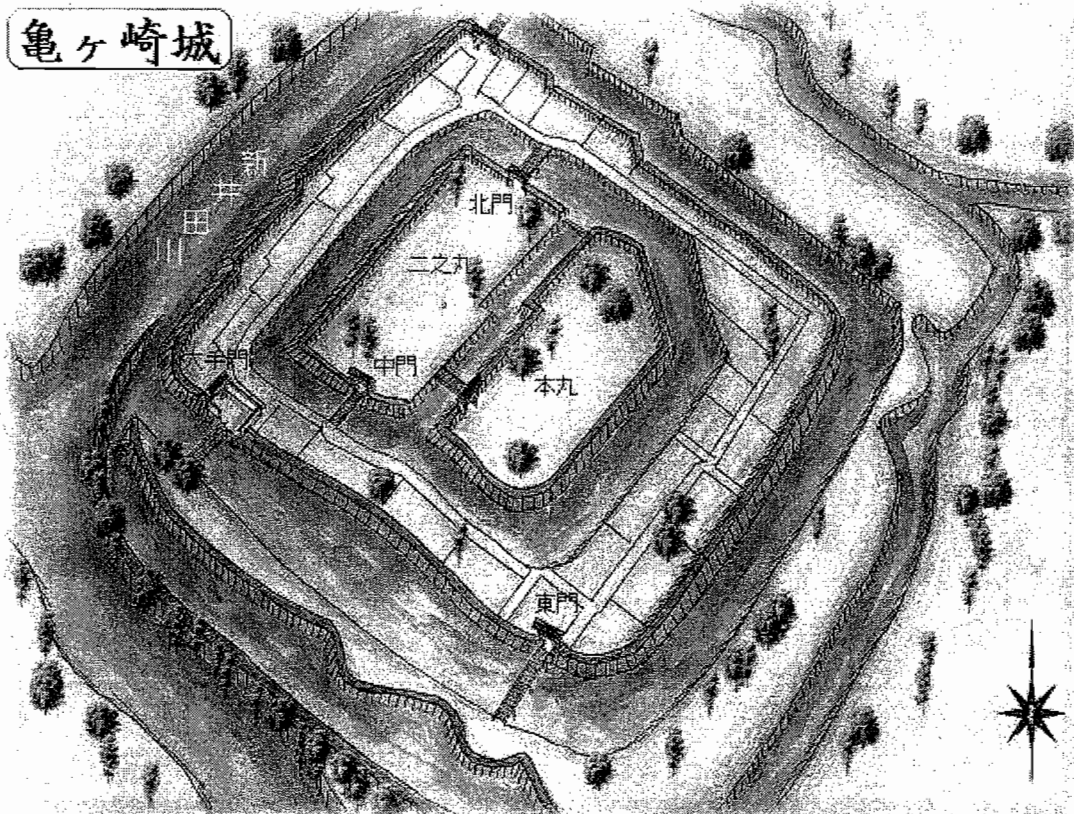


# 五泉城主 甘糟備後守の旧跡を訪ねて

～酒田城址（亀ヶ崎城址）探訪の旅～



五泉帛の帯保存会

2013年6月9日

天下布武を目指した織田信長が本能寺に倒れ、羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）が新たな天下人として、支配力を強めていった天正 11 年（1583）、ひとりの武将が五泉城主としてこの地に赴任してきました。

命令を下したのは上杉景勝。

偉大なる上杉謙信の遺命を継ぎ、越後の支配を盤石なものとするために、強い絆で結ばれた腹心を戦略上の要所へ派遣していました。

景勝により五泉城主に任ぜられたのは、<sup>あまかすびんごのかみかけつく</sup>甘糟備後守景継。

<sup>よわい</sup> 齡 30 を過ぎたばかりの、武勇に優れた若き城主でした。

甘糟備後守は、上杉氏の支配力の拡大や天下の情勢により、五泉城主から山形県酒田城主、宮城県白石城主へと武将としての階（きざはし）をかけたのぼります。

しかし、天下分け目の関ヶ原の合戦があった慶長 5 年（1600）、白石城主であった甘糟備後守に、これまでの苦労や華々しい戦績を無にする大きな転機が訪れました。

失意のなかでも、決して二君に仕えようとせず、上杉氏の掲げる「義」に殉じた武将甘糟備後守。

去年は、彼の足跡の一部を宮城県白石城に訪ねました。

今年も、白石城の前に赴任した酒田城址を巡ります。



## 甘糟備後守景継 あまかす びんごのかみ かげつぐ

天文 19 年？（1550 年）～慶長 16 年（1611）

上田長尾家譜代の家臣登坂加賀守清高の子。天正 5 年（1577 年）、上杉謙信の命により戦死した甘糟継義の名跡を継ぎ、藤右衛門清長と名乗ったが、後に主君上杉景勝の一字を賜り景継と改名した。

第四次川中島の戦いでは退却時の殿軍を勤め、武田側の追撃を抑えて味方の越後退却を支えるなど、実戦はもとより武勇全般に優れた武将として上杉二十五将に数えられている。

天正 5 年（1575 年）に護摩堂城主（田上町）、天正 11 年（1583 年）には、景勝により五泉城主に任じられ、文禄 2 年（1593 年）には庄内酒田城代となり、慶長 3 年（1598 年）に主家の移封に従い会津へ移り白石城代を勤め、2 万石を知行した。

慶長 5 年（1600 年）、徳川家康による会津征伐に対して守りを固めていたが、景勝の命で会津参府中の留守の際を突かれて、7 月 24 日、伊達政宗に白石城を奪われた。

慶長 6 年（1601 年）の米沢移封後は 6600 石を知行。

慶長 11 年（1606 年）、桜田御門普請の頭取を勤め、将軍家より時服（じふく）と銀子を賜った。

軍記物等では、妻の急死により会津へ戻った留守中に白石城を奪われたとし、そのことで景勝の怒りを買って死罪になりかけ、以後景勝から冷遇を受け、直江兼続の一配下に左遷された等の記述があるが、記録は残っていない。

慶長 16 年（1611 年）年 5 月 12 日に死去。寛永 10 年（1633 年）に書かれた『甘糟家先祖書』には「故あって自害」とあり、6600 石は取り潰されたとあるが理由は不明。墓は、米沢の林泉寺にある。

景勝の死後の寛永元年（1624 年）、その子どもたちは次代藩主定勝よって 200 石で上杉氏に復帰する事を許されたとされる。寛永 3 年（1626 年）年 11 月の記録では、景継の子、久五郎吉継（200 石）と彦七郎（帯刀）長継（300 石）の名が認められる。

また、寛永 5 年 12 月 18 日（1629 年 1 月 12 日）に米沢北山原で家族と共に斬首され、平成 19 年（2007 年）に日本におけるキリスト教殉教者 187 名中の 1 人として列福された甘糟右衛門信綱（洗礼名ルイス）は、景継の次男とされ、上杉氏重臣も上杉定勝に助命嘆願し、また甘糟右衛門にも改宗を勧めたが、甘糟右衛門信綱はキリシタンを貫き、結局斬首されたと伝えられている。

軍記物の中には、家康は景継を高く評価し、景勝から冷遇を受け続けている事を知り、2 万石を与えて迎え受けようとしたが、景継は「景勝殿の怒りは私の責任であり、いかなる罰を受けてもそれは尤もな事である。それに長き事上杉氏に仕えており、今更二君にまみえる事は出来ない」と述べてこの誘いを断り、これを聞いた家康は「そういう人物だからこそ配下に欲しかった」と悔しがったという話が記載されている。

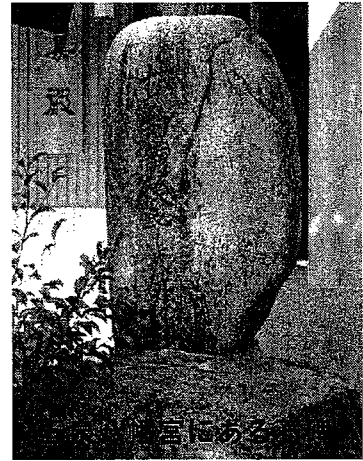
戊辰戦争で、軍務参謀となり長岡藩と同盟して戦った米沢藩の重臣、甘糟継成は子孫。

## ◇五泉城と興泉寺

甘糟備後守は、天正 11 年（1583 年）、上杉景勝に抵抗する新発田重家に対抗するため、五泉城に入っている。五泉城は、現在の八幡宮にあったといわれている。周辺には、「城廻」「馬場」などの地名が残っている。



備後守は、五泉城主の時、当時船越にあった「興隆寺」を城の南方に移し、「興泉寺」と改めさせている。戦死した部下を弔い、城の守りを固めるためといわれている。



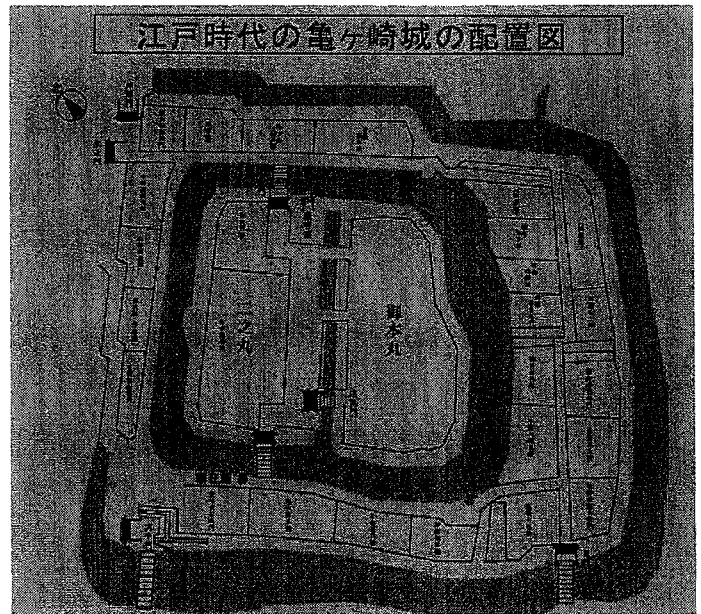
## ◇酒田城(東禅寺城→亀ヶ崎城)

甘糟備後守は、文禄 2 年（1593 年）に庄内酒田城代に任じられている。

酒田城は古くは東禅寺城といい、庄内平野を西流した最上川と、新井田川の合流地点に位置している。標高は約 3m で、豊富な水と低湿地を巧みに利用して構築された城である。

東禅寺城は、文明 10 年(1478)頃に創築がはじまりとされる。

天正 16 年(1588)、上杉配下の本庄繁長がこの地を攻め、庄内は上杉氏の支配となった。東禅寺城には繁長自らが入った。上杉氏はその後、川村彦左衛門、甘糟景継、志田義秀らを城主とし、城の外郭も拡張された。



備後守は、酒田の水路の開削や米倉の増築、平田郷開田などに力を注いだという。

城は、江戸時代初めに亀ヶ崎城と改称し、酒井忠勝が庄内藩主となった。忠勝は居城を亀ヶ崎城にするか鶴ヶ岡城にするか迷った末、酒田は港町で大いに栄えているが鶴ヶ岡は居城を置かないと衰退するかも知れないということで鶴ヶ岡に居城を置いた。酒井氏は徳川四天

王筆頭で譜代中の譜代、周囲の外様大名を監視する役割から亀ヶ崎城も存続を許され、江戸時代を通じて城代を置き支配した。

現在、本丸跡・二ノ丸跡は山形県立酒田東高校の敷地となり、一部の土塁を残して遺構はほとんど残っていない。三ノ丸跡は酒田市立亀城小学校、四ノ丸跡は山形県立酒田商業高校の敷地となっている。三ノ丸南側に位置していた搦手門は、唯一の現存建造物であり、円通寺山門として移築されている。

明治になると酒田には亀ヶ崎城には民政局置かれ酒田県庁となった。のちに合併で山形県が成立すると亀ヶ崎城は解体された。



#### ◇白石城（しろいしじょう）別名益岡城（枳岡城）※2012年6月3日に見学

慶長3年（1598年）、甘糟備後守は、上杉氏の会津移封に伴い城主を勤めた。

江戸時代には、仙台藩伊達氏の支城として用いられ、片倉氏が代々居住。九州の八代城などと並んで、江戸幕府の一国一城制の対象外とされて明治維新まで存続した。天守の代用となっていた三階櫓は、支城という格と幕府への配慮から天守の名をはばかり大櫓（おおやぐら）と名づけられたとされる。

明治初頭の廃城令により廃城処分とされ、ほとんどの建物は破却されたが、三階櫓など本丸の一部が1995年に木造で復元されている。



